

國學院大學學術情報リポジトリ

2020年度国際研究フォーラム「見えざるものたちと日本人」報告書

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2025-05-16 キーワード (Ja): NDC8:302.1 キーワード (En): 作成者: 國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001625

非人間の／による認識の存在論的造作^{ぞうさく}

廣田 龍平
(東洋大学)

はじめに 見えざるものが見えること

紙上では難しいことではあるが、できればリンクをたどって、ある動画を見てもらいたい。報告者が動画 SNS の TikTok で見つけた短い動画である¹。2020年1月10日に投稿されたこの動画は、2022年1月30日の時点で約2100万回も再生されており、♡(いいね)は約450万、コメントも約2万5700件ついている。かなり話題になったものだということが分かるだろう。キャプションは英語で、「私の友達の家はマジで出るから、こんなことが起きた。最後まで見て」(傍点は大文字)とある。映像は屋内を映し出しており、撮影者とその友人の声が聞こえる。撮影者は誰もいないところにレンズを向けていたが、ある瞬間に、顔を認識してイヌの耳と鼻を上書きする AR エフェクトが作動してしまう。AI が、そこに誰がいるのだと判断して、人間用のエフェクトをつけたのである。撮影者は、「彼女がそこにいる！ いる！」と興奮し(「スーザン」という名らしい)、自分が見えるならば舌を出してと言う。すると、誰もいない空間からエフェクトの舌が出る。その反応に撮影者が息を飲んだところで動画は終わる。この投稿者はその後も似たような動画を多く載せ、コミュニケーションを取ろうとしている。ここまではっきりと「霊」がエフェクトに反応したものは珍しいが、誰もいない空間にカメラを向けていると、人間がいなければ作動しないはずのエフェクトが作動したことを報告する動画は TikTok に多く見られる。だが、この動画ではいったい何が見えているのだろうか。

今回の国際研究フォーラムは「見えざるものたちと日本人」、そしてこの報告が行なわれたワークショップは「見えざるものをカタル」だった。趣旨説明には「神、幽霊、妖怪、鬼、などなど、日本人の周りには、さまざまな「見えざるもの」たちがいた」とある²。この前提にひそむものは何なのだろうか。TikTok 動画もまた「見えざるもの」を撮影しているように見えるが、しかし誰かに何かは見えている。見えざることと見えることの関係は、どのようなものなのだろうか。本報告は、先端技術と見えざるものをめぐって、その関係について検討するものである。

何にとって見えないのか(見えるのか)

幽霊や妖怪といったものは、肉眼での目撃証言も多いのだが、それでもなお「見えざるもの」とされるのは、科学的・合理的に考えて客観的に実在しないからだろう。存在しな

いのならば見えないので、見えるというのは主観的な妄想、錯覚や幻覚でしかない。だから「カタル」ことでしか表現できない。従って、TikTok 動画も霊を認識したものではない—と私たちは考えるだろう。その一方で私たちは、見えざるものであるにもかかわらず存在するものがあることを知っている。そうしたものは、肉眼ではなくカメラやセンサーなどの機械装置によってはじめて捉えられることが多い。

機械は肉眼と違って主観性を持たないので、現実を客観的に表象する。ロレイン・ダストンとピーター・ギャリソンは、このような「機械的客観性」の考え方が19世紀末に欧米で生まれ、現在まで持続していることを論じている [ダストン、ギャリソン 2021: 3 章]。私たちがこの種の客観性を共有していると言えるだろう。だがダストンらは、20世紀に入って科学者のあいだで「訓練された判断」という対象認識の様式が生じたことも指摘する。それは、「自然なものにもとづくように操作され、しかしエキスパートの理解によって特定の特徴を明るみに出すよう構成される」[ibid.: 293] 科学的イメージを生み出す、客観性を補完する科学者たちの認識能力である。

数年前に報道された、地球から5500万光年離れた巨大ブラックホールの画像は、そうした機械的客観性と訓練された判断、さらにはシミュレーション [ibid.: 7 章] を組み合わせたものとみなせるだろう。このブラックホールは、地球上からでは単一の巨大望遠鏡でも観察することができない。そのため撮影にあたっては「超長基線電波干渉計 (Very Long Baseline Interferometry: VLBI) という仕組みを用いています。世界中に散らばる望遠鏡を同期させ、地球の自転を利用することで、地球サイズの望遠鏡を構成します」³。

ただ、報道で使われた画像は一つだが、実際には複数のイメージング技術により多くの画像が生成され、シミュレーションと比較され、パラメーターが調整されるなどしている [The Event Horizon Telescope Collaboration *et al.* 2019]。すべての画像に科学的根拠はあるが、それでも科学者たちは報道用に適切な画像を判断したわけである。

ここで興味深いのは、望遠鏡やシミュレーション、ブラックホールの周囲から放たれる電磁波、地球の自転など、きわめて多くのモノが媒介することにより、ブラックホールが肉眼に「見える」ようになったということである。私たちが見えざるものを見て、客観的に実在すると言えるのは、こうした非人間的な機械装置が媒介するからこそでもある。このような無数の媒介は、肉眼での「見える」「見えない」とは異なる認識を可能にする「存在論的造作」(ontological furniture) として概念化することができる。

存在論的造作

存在論的造作は、フランスの人類学者フィリップ・デスコラが提唱した概念である。それによると、世界中の諸民族は、つねに「同じもの」を見ているのではない。なぜなら各々の人々が生きる世界の存在論的造作は、その人々ごとに違った「もの」から構成されているからだ。アマゾンの狩猟採集民族アチュアルはクォークを見ることができないし、CERNの研究者はイウィアンチュ (アマゾンの精霊) を見ることができない。そもそもクォークもイウィアンチュも、自然な環境のなかに「もの」として見えるわけではない。クォーク

の場合は、きわめて複雑な機械装置によってのみ、間接的な手がかりが探知される。またイウィアンチュも、シャーマンだけが出現したことを推測できるような、複雑な手がかりの集まりによって探知できる。こうした媒介=存在論的造作が、両者では大幅に異なっているのである [Descola 2014: 433-434]。本報告では、近代人にとってシャーマンよりもさらに遠い認識様態を考えてみたい。それはすでに紹介したように、機械・AIによる視覚的認識である。

21世紀に入って、機械が可視的データから人間の顔を検出する機能は、一般でも日常的に使われるようになった。特に近年は、技術の加速度的発展により、ほぼリアルタイムで違和感のない顔認識ができるようになってきている。ただ、利用者の多くは、機械がどうやって顔を見つけるのか分かっておらず、現在では開発者さえも認識プロセス全体を掌握できないほど複雑なものになっている。だが他方で私たちは、機械が主観性を排することにより、人間以上に正確に対象を捉えられるというイメージも持っている。それを示しているのが冒頭の TikTok 動画だ。人間とは異なったプロセスで、人間が認識してもいいはずのものを、機械だけが正確に認識してしまうのである。

見えざるものと顔認識

見えざるものを機械が写してしまうものの代表例は、もちろん心霊写真である。だがAIの場合、人々は、単に感光した（撮像素子が出力した）のではなく、能動的に霊を捉えることができるという点で、「機械は霊を認識できる」というイメージを持ってしまうことがある。ここが現代の TikTok 動画と古典的な心霊写真の違いである。

このイメージが顕在化したのはいつごろなのだろうか。21世紀のものごとを調べるとき、大変参考になるのが電子掲示板の2ちゃんねる（現在は5ちゃんねる）である。なぜなら1999年から20年以上にわたる投稿を閲覧することができるからだ。超常現象を主題とするオカルト板のデータを検索してみると、(少なくとも日本語圏で) 広まりはじめた時期について、だいたいのあたりをつけることができる。

もっとも古いのは2006年12月21日のもので、「顔認識する最新のデジカメで何もないところにそれが反応した。／誤作動だよな？」という投稿がある⁴。また2008年1月にも、顔認識カメラによって心霊写真とは違った心霊体験ができることを期待する投稿がされている。2010年代は無数の報告や画像が出回るようになったので省略するが、その最新版が、顔認識できるアプリで撮られた映像ということになるだろう。

機械による直示

こうした事例は、霊を取り扱う分野（民俗学、心霊研究）のなかでは、どう位置づけられるだろうか。霊認識動画は偶然そうなったものが多いが、冒頭のスーザンのように、コミュニケーションを取るためにやってみるという行為も時折みられる。そうしたものをアメリカ民俗学では直示（ostension）と呼ぶ。肝試しのように「霊に会いに行く」ものが古

典的な例である。機械を使った霊的直示としては、顔認識ではなく幽霊探索アプリを用いて大学生が肝試しをするという事例がエリザベス・タッカーにより論じられている。タッカーはこれを、先端技術を用いた肝試しということで、^{ハイパーモダン}超近代的直示と名付けている [Tucker 2017]。本報告で取り上げた顔認識も、コミュニケーションを取ることが目的ならば、超近代的直示に分類することができる。

機械によって霊を「見える」ようにする実践は 19 世紀後半から、心霊研究の分野でなされてきたものでもある。ある研究者によると心霊写真は「霊の認識と記録を同時に、しかも客観的に」実行するものとして画期的だったとされる [ハーヴェイ 2009: 16]。厳密に言うと現像のプロセスが入るので「同時に」ということにはならず、その点、アプリによる直示は心霊写真の理念を厳密な意味で達成したものということになる。

単に非人間的な存在なら人間に見えないものを認識できるというものならば、人間に化けた狐狸がイヌに正体を見破られるという話は多い。それに対して現代の機械による視覚的認識の特徴は、何を顔として捉えているのか（知覚しているのか）が人間にも理解できるところにある。つまり、人間と非人間が知覚を共有しているのである。また、霊とのリアルタイムな接触は「こっくりさん」などの有名な先例があるが、機械による霊の認識はきわめて視覚的であり、機械的客観性という裏付けがある（主観的な妄想と解釈できない）点で異なる。さらに心霊写真と比較すると、機械が「知能」を持ち、単に見えざるものを知覚するだけではなく、それを「顔」として認識していると理解されている点で異なる（この点でイヌと比較できる）。機械による霊認識は、私たちの知覚と認識を増強し、さらに主観性を抑制する客観性を有しているのである。

機械の異なる存在論的造作

「見えざるもの」というとき、何にとって「見えない」のだろうか。本シンポジウムの前提にあるのは、科学的で合理的な存在論的前提——妖怪もあの世も霊も実在しない——であるように思われる。それに対して本報告では、異なる存在論的造作の形成という観点から、心霊動画とブラックホールの映像という、どちらも最先端の技術を用いる以外に共通点がない、「見えざるもの」の事例を紹介した。前者では、人間と顔認識 AI、AR エフェクト、そして心霊概念によって、霊が可視化された。後者では、人間と VLBI、イメージング技術、そして天体物理学によって、ブラックホールが可視化された。この 2 つは、どちらも現代の現象だが、しかし大幅に異なった媒介から構成されており、それを本報告では存在論的造作と呼んだ。

ここで重要なのは、だからといって霊もブラックホールも人間によって「つくられたもの」ということにはならない点である。むしろ人々に「見える」ものとしての霊もブラックホールも、イウィアンチュもクォークも、人間と多くの非人間的な存在によって作られ、客観的に実在したものになっていく。その作られ方や実在の仕方（存在論的造作）が、大きく異なるということである。

「見えざる」も「見える」も、素朴な科学的・合理的な判断によって決定されるものでは

ない。むしろ現代においては、非人間的機械の認識を私たちが捉えることによって、「見えること」は拡張している。技術的發展により次々と実現されていく人間と非人間との共同的認識は、宇宙へのまなざしも、霊へのまなざしも、絶えず新しいものになっているのである。

注

- 1 <https://www.tiktok.com/@sydney.carpentier/video/6780114201307368709> 2020年1月10日投稿。
- 2 國學院大學「令和2年度国際研究フォーラム「見えざるものたちと日本人」」<https://www.kokugakuin.ac.jp/event/200636> (2020年11月13日更新)。
- 3 国立天文台 (NAOJ)「史上初、ブラックホールの撮影に成功—地球サイズの電波望遠鏡で、楕円銀河 M87 に潜む巨大ブラックホールに迫る」<https://www.nao.ac.jp/news/science/2019/20190410-eh.html> (2019年4月10日の記事)。
- 4 5ちゃんねる「ほんのりと怖い話スレ その36」<https://hobby9.5ch.net/test/read.cgi/occult/1166467834/n32> (2006年12月21日投稿)。

参考文献

- ダストン、ロレイン&ギャリソン、ピーター 2021 『客観性』瀬戸口明久ほか訳 名古屋大学出版会
- ハーヴェイ、ジョン 2009 『心霊写真 メディアとスピリチュアル』松田和也訳 青土社
- Descola, Philippe. 2014. The difficult art of composing worlds (and of replying to objections). *HAU: Journal of Ethnographic Theory* 4 (3): 431-443.
- The Event Horizon Telescope Collaboration *et al.* 2019. First M87 event horizon telescope results. IV. Imaging the central supermassive black hole. *Astrophysical Journal Letters* 875 (1).
- Tucker, Elizabeth. 2017. “There’s an App For That”®: ghost hunting with smartphones. *Children’s Folklore Review* 38: 27-37.